

■ 特別講演・座長のまとめ

同時代を共有させていただいた座長からの言葉

Words from chair person who shared the time with great thanks and respect to Professor Yamazaki

山科 章

Akira Yamashina, MD

東京医科大学 循環器内科学分野 教授

Department of Cardiology, Tokyo Medical University

山崎純一先生と私は大学卒業年も同じで、心臓核医学に関心をもったのも同じころである。最初にお会いしたのは、私が以前勤めていた聖路加国際病院で心臓核医学検査を始めたくて、東邦大学の核医学検査室(当時は集中治療室内にもγカメラが設置されていた)を見学させていただいた1982年である。当時の心臓核医学は、心機能を評価する ^{99m}Tc -HSAやin vivo赤血球標識によるファーストパス法と心プールシンチ、 $^{201}\text{TlCl}$ による心筋血流シンチ、心筋梗塞病変を描出する ^{99m}Tc -ピロリン酸シンチであり、もちろん撮像はアンガーカメラによるプラナー像のみであった。画像処理もデータ解析装置も現在のものとは雲泥の差があった。それでも、そのとき、山崎先生の考え方や取り組みを聞いて、きっと心臓核医学は、その先、循環器領域において重要な位置を占めるようになると確信したものだった。その後、心臓核医学検査も機器・装置の開発・発展、画像処理・データ処理の進歩、新し

いトレーサの開発などあり、大きく進歩した。そのなかで山崎純一先生はこの領域のリーダーとして心臓核医学の臨床、研究、教育において大きな貢献をされた。

その山崎純一先生のライフワークの一つである心臓核医学について、ともに歩まれた40年間の歴史を振り返りながら、心筋代謝シンチ、特に脂肪酸代謝をみる ^{123}I -BMIPPシンチ、交感神経機能をみる ^{123}I -MIBGシンチにフォーカスを当てたお話しをいただいた。あとを追いかけてただけではあるが、同じ時代を共有した者として大変な感銘を受けた。また、われわれに必要なとされる臨床医、教育者、研究者としてのあり方も学ぶことができた。

山崎純一先生は現在、東邦大学学長として4学部の学生、教員のリーダーとして多忙な生活を送られているが、わが国の心臓核医学の発展のために引き続きご指導賜りたい、と記して、座長という言葉とする。